

序章　本研究の目的と方法

第1節 研究の動機

1. 現代社会における美術教育の必要性

現在の社会では女性の社会進出が目立ってきた。そして、働く女性が仕事と子育てを両立できるような環境の整備が未だ整っていないため、日本では少子化減少が進んでいる。このような現代の日本社会において少子化現象が進む中で、親はかえって一人の子どもにかける期待を大きくしているため、ベビーブームに育った筆者の頃と比べて現在は子どもたちの全体数は半分になり、公立学校が閉鎖されたり、私立学校が教員をリストラしたりしている状況においても、受験戦争は止むことはない。受験戦争の止まない学校教育現場では、美術や図工は学校教育では副教科と呼ばれ、対置される国語や数学（算数）などの主要教科からすれば美術教育は周辺教科や息抜としてみられている。そして、こうした受験を助長するような社会に従って、文部省は学校における図工や美術の時間数を削減している。

現代における日本の現状では、学校における美術教育は時間が削減されて、若い美術教師を新採用する代わりに非常勤講師を雇い続けているために専任の美術教師は学校全体から増えることはなく減少しているし、また、美術を専門としない小学校の教師は民間教育運動が下火になったことで美術教育を話し合う機会を失って、美術教育はかつてほど活気があるとは思えなくなった。しかし、だからといって美術教育が学校で必要でなくなったということではない。幼児から小学校低学年の子どもたちは文字による表記と同様かそれ以上に絵で物事を説明するし、それ以上の年齢の子どもたちは再現性のある上手な絵を描けるようになりたいと思っているようである。つまり、美術教育を求めていないのは子どもたちではなく、社会であって、社会を反映させて制度を決めている大人たちであるとい

える。

しかしながら、大人たちは子どもたちから美術を遠ざけている反面で、自分たちは頻繁に海外を旅行して、ヨーロッパの伝統ある町並みやハワイやベトナムの自然と共生するリゾート地で、美術品、洋服、雑貨、美しく盛り付けられた食事に楽しさと安らぎを求めている。国内でも多くの人々は、インテリアコーディネーターに例えれば「イタリアンモダン」をテーマに自宅のインテリアの変更を依頼したり、ガーデニングに熱中したり、または、お金があればそれらをやってみたいと思っている。戦後の日本社会を発展させるために人々は、生きるために美的環境を整えるゆとりを切り捨て、西欧文化に憧れを抱いてこれを受け入れ続けてきた結果、日本における日常生活に美的な環境を整えようすることは、万人に育まれてこなかっただし、そのゆとりもなかっただと思われる。そこで、現代の人々は、アメリカやオーストラリアといった新しい国の美的な環境でさえ憧れて楽しみ癒され、無機的で画一的な現代のマンションにおけるインテリアをそいつた雰囲気に変更しようと願うのであろう。日本の都市部では、人々に安らぎを与えられるような美的環境を彼らは日常では十分に整えてこなかっただために、大人たちは視覚的に癒される場や空間、自然を生活に求めていながら、その方法を知らないために自らはつくり出すことも困難なのである。大人たちは、ものづくりや環境づくりといった美的な存在や活動を自らは求めていながら、子どもたちには彼らの将来のために美術教育よりも受験に役立つ教科を優先させているといえる。

それでは、美的な活動は子どもの頃に学習させずに大人になってから学べばいいかというと、そうとも限らない。なぜなら、第一に、現在の日本において楽しく安らぎのある美的な生活環境を整えようとしても、上手くはいかず、結局専門家に委ねてしまったという人々の声があるように、子どもの頃から学習する取り組みを行わないと大人になってしまってからでは学習を十分に習得できないこともあるからである。第二には、誰しもが経験してきたと思われるが、大人と比べて多くの子どもは新しい物への興味も強いし、美しい物への感動も起きやすいと思われるからである。筆者自身、子どもの頃に感動した自然風景の美しさを未だに覚えていたり、そのような話を人から聞いたりするし、先日も近所に住む2歳の子どもは目を輝かせてピーズがどんなにきれいであるか教えてくれた。つまり、

無機的でゆとりのない生活空間が広がっている現代においてこそ、感動や喜びを伴う美的な活動は子どもたちの成長過程にいっそう必要な学習となる。そして、教育の成果が生まれれば、将来の日本に美的な環境をもたらすことができるのも彼らである。

ただし、確かに現在の学校美術教育は現代社会に要求される学習や、社会に適した学習に大きく変更されてはいない。美術教育が時代に左右されるために、大人たちが子どもの頃に指導された内容が現代に生かされる学習であるとはいえないため、現代に生きる子どもたちには彼らのための学習が常に考えられていかなくてはならない。科学技術の発展や産業構造の変革に伴って、社会が美術に求める役割も変わって、今では写真のような精密な絵を描くことも、製品の大量生産を行うためのデザインも、義務教育における図工や美術では求められていない。かつての美術教育はその時代に必要とされていたという意味では意味がある。大人たちは現代において本当に必要な美術教育を考え直し、子どもたちに与えるべきであろう。そのためには、専任の美術教員が減少している現在の状況において、学校美術教員のみならず、研究者、芸術家、社会教育施設関係者、保護者、社会の人々が時に話し合って、お互いに協力しあえるようにして、美術教育の新たな姿を子どもたちのために求めていくべきである。

2. 学校美術教育における現状の課題

社会の進展に伴って、日本人の生活環境はめまぐるしく変化し続けている。現代の家庭で利用される日常的なメディアは、東京オリンピックを機にラジオからテレビへ媒体を移して視覚化されはじめ、現在ではインターネットが注目されている。その上、インターネットがケーブルテレビや携帯電話から一般に利用できるようになり、学校にも導入されるようになったことで、子どもたちにとってもインターネットは身近なメディアとなった。こうして、家庭で日常的に利用されるテレビやゲーム機のメディアの中にインターネットが加わったために、子どもたちがメディアを通して画像や映像を含む視覚的な情報に携わる機会も拡大してきた。それにもかかわらず、唯一、学校教育で画像や立体を含む視覚的

対象を創造し、学習している美術教育において、教師が情報化社会で生活する子どもたちに指導する学習内容は、不思議なくらいに変化しない。例えば、版画を彫って年賀状を刷ったり、校外のお城や寺社を水彩絵の具で描いたりといった題材は、50年前も今も指導されている。このことからも、学校美術教育の題材が社会の移り変わりに左右されることはなく、あまり変化していないことは明かである。

ただし、小学校における美術教育で、平成4年より新たに図工科に設置された学習領域に「造形遊び」があるが、この「造形遊び」は、素材体験や感覚を尊重しており、塾通いから時間的ゆとりを持てず、遊び場としての空き地を失い、遊びといえば屋内でゲームをする現代社会に生きる子どもたちにあえてプリミティブな活動を与えようとしているから、これは、社会の進展に沿う学習ではなく、その逆であるといえる。「造形遊び」は、ゆとりのない現代社会に生きる子どもたちに欠落しつつあるプリミティブな活動を補ってはいるが、これは過去の子どもたちが自然のうちに経験してきた活動と同じ意味を持つため、美術教育の社会化を促進させる活動とは対置される。現在の学校美術教育においてはコンピュータが通常から子どもたちに利用されていないばかりか、未だに子どもたちがアニメのキャラクターを描くことは指導者によって認められておらず、漫画や写真が扱われた題材は新しく、子どもたちが映画を考える学習機会も存在していないため、学習内容のほとんどは、時代遅れであると言わざるを得ない。従って、学校美術教育の大部分は時代に適応しているとはいはず、筆者は、現在の情報化社会に即した美術教育が学校で展開されているとは思えないである。

もちろん、バス、水彩絵の具、粘土といった材料用具を扱うことは、表現活動の基礎であるため、学校美術教育における学習に、普遍的な表現活動も重要である。ただし、子どもたちのほとんどは将来、芸術家になるのではなく、美的な商品や情報を選択したり、美術館を訪れたりする「美の消費者」になるとを考えると、子どもたちには個人的で内向的な表現に偏った学習だけではなく、積極的に社会に向かう鑑賞と表現の学習が不可欠である。そして、この社会に向う学校美術教育という観点からすると、50年を経ても変わらない個人的で内向的な表現活動をのみ行っている現代の学校美術教育の姿勢は否定されるべきである。

現在の学校教育における個人的な表現活動への偏りは、美術が社会や文化から隔離された個人的な活動であるという認識を、学校で子どもたちに植え付けている。そして、本来は彼らの生活に潤いを与えるはずの美的な活動であるはずの美術が、日本においては学校美術教育で個人的な活動として認識されたまま成長した彼らにとって非日常的な存在となってしまう。広域な意味での美術は、人々の感覚や感情をゆすぶる必要な経験や行為であるから、その時代における人々の文化や社会と美術が結び付けられないならば、将来は大人となる子どもたちにとって美術は日常とかけ離れた存在になってしまう。つまり、学校美術教育で美術と文化、美術と社会が密接な関係を保っていることを子どもたちに知らせないことによって、美術は人々の生活に必要のないものという固定観念を学校で子どもたちにつくり出てしまっているのである。そもそも、現実の学校美術教育においては子どもたちが社会と結びついた美術を学ぶ機会は少なく、指導者が社会と結びついた美術を子どもたちに教えるために題材を開発する資金や資料は用意されておらず、現職教育のプログラムも国内では存在していない。そこで、筆者は、現代の社会と結びついた学校美術教育を総合的に促進させられる研究が子どもたちのために行なわれるべきであると考える。

ところで、日本の学校美術教育においてはメディアは用具でありながら、その利用方法によって絵画や彫塑といったように学習領域を区分する程、美術教育では軽視できない存在である。花篠實が、美術教育は「材料用具をベースにして、その表現メディアの歴史的変遷がそのまま美術なり、その教育の系譜を作ってきた、いうならばメディアそのものの教育であるといいい方もできなくは無い」と述べるように¹⁰、また、自由画教育運動がクレヨンの普及に伴って展開したように、メディアは美術教育を左右する。しかし、現代の美術教育に登場したコンピュータやインターネットのメディアが、既に学校に導入されている地域があるにもかかわらず、学校美術教育においてインターネットを活用する事例や研究はほとんど増えていない。現実には子どもたちの多くはインターネットに興味をもつ

¹⁰ 花篠實「『メディア教育・異文化理解教育としての美術教育』共同研究をふりかえって」『メディア教育・異文化理解教育としての美術教育・映像教材およびガイドラインの開発』平成8-10年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書、1999、p.4

ていながらも、現在の時代を象徴するメディアであるインターネットが美術教育において利用されていないのは、この領域における研究がされていないことによって、インターネットを如何に活用したらよいかが指導者にとって分からないうことが、学校美術教育でインターネット利用の学習が展開しない大きな原因になっていると考えられる。

このままインターネットが美術教育で活用されないと仮定すれば、新しい時代に適したメディア活用に関わる美術教育内容は子どもたちに学ばれないし、画像検索やWebデザインに代表されるようなインターネットにかかる美術の学習部分がすべての子どもたちに平等に教育される機会は失われる。その上、現代社会に適応したメディアであるために普及しているインターネットを美術教育においてこの機会に活用しないなら、美術教育はこの先の将来も現代社会からかけ離れた内向的で個人的な表現活動に偏ったまま、50年間変わらないような題材を子どもたちに指導していくことになる。今の学校美術教育は、この先、個人的な表現活動に偏ったまま時代に取り残されていくか、社会を積極的に受け入れた美術をこれまでの学習に取り入れて、個人と社会のバランスを尊重した時代への適応を行うかの岐路に立たされている。子どもたちのために学校美術教育があるのなら、今は、学校美術教育で子どもたちの将来のために、時代に適応したメディアを利用して社会に適した学習を開発していくべき時であるといえる。

3. インターネットによる美術教育の社会化

学校美術教育においてインターネットを活用することによって美術教育を積極的に社会適応させるには、いくつかの変革が行なわれることが前提である。その変革は、インターネットを学習に活用することで、最初は子どもたちの学習道具にもたらされる。そして、子どもたちの学習道具が変わることで、教師による学習方法が道具に合うように変更される。学習方法が変更されれば学習の選択肢はこれまでより拡大し、これによって指導者は学習目標をも変えられるようになることで、学習そのものを変革できる。そして、この変革は子どもたちの学習だけに留まらず、教材や、指導方法に及んで、教師たちの指導をも

変えることができる。学校美術教育が変わるなら子どもたちが成長した後には、社会における美術についてのイメージまでもがこれまでの人々と異なってくるであろう。このように、学校美術教育にインターネットが利用されることで、従来の美術教育では学習できなかつたような教育的な効果が認められれば、様々な人々に、広い範囲でその影響が及んでいく。

そこで、ここで、インターネットが学校美術教育にもたらす学習の変化とその効果について例を挙げてみる。例えば、教師は、外国の学校がインターネットに公開している美術教育の作品画像を用いて、子どもたちに自分達の作品との違いを話し合わせるとする。ここで、インターネットを活用することで、日本の子どもたちはこれまでにはなかった外国という広い範囲から、外国の子どもたちが生活する社会を視野に入れた新たな学習を行えるようになり、これによって人々に学校美術美術教育に新たな視野で学習がもたらされることになる。やがて、子どもたちはインターネットを活用して学校や教室、国内と海外という物理的で地理的な制約にとらわれずに、様々な作品を見る学習を通して、作品と同じように様々な価値観が世界中にあることがわかるようになる。ここで、学校美術教育におけるインターネットの利用を行なうことによって指導者は、子どもたちに多様な美術は多元的な価値観の下に作られることを理解させられるようになる。そして、インターネットは学校美術教育に美術作品を通して多様な現代社会の片鱗を子どもたちに提示する。

次に、これまで子どもたちは、図鑑の標本を資料にして写し描くことによって画面に生物の絵を描いてきたが、インターネットを学校美術教育において活用することで、インターネットから実際に生物が生息している様子を写した画像や動画を探し出せるようになり、これを資料にして描けるようになる。こうして、インターネットの活用を美術教育で行なうことによって、静止したような標本から動きのある画像に資料が変えられることで、子どもたちは動きのある生物画を描けるようになり、各自の表現意欲をこれまでよりも満足させられるようになる。また、子どもたちが他の子どものために自らこうした画像や動画をインターネット上へ提供することもある。ここでインターネットはこれまでの学校美術教育に新たな道具と学習をもたらすことになる。

そして、教師は自らが実践したことのない題材を子どもたちに指導したり、こうした学

校美術教育の教材、学習成果、指導案をネットワーク上のデータベースから取り出して教師同士で互いに共有したり、ネットワーク上の仮想空間を利用して電子メールで研究者と共に美術教育理論を話し合うことができるようになる。こうして、インターネットの利用が、学校美術教育に常に新しい教材をもたらし、教師に現職教育の機会を増大させることになる。その結果、現職教育の機会が増えることで、教師はよりよい教材開発が行えるようになり、美術教育は教師によって効率的に学習されて活性化される。

さらに、保護者は、World Wide Web上の子どもたちの作品を見て電子メールで学校に感想を送ることや、子どもたちはWorld Wide Web上の作品や情報をみて作家やデザイナー、または学芸員に質問することもインターネットを利用すれば可能になる。ここで、インターネットが子どもや教師によって進められてきた学校美術教育にもたらすのは、多様な人々による社会的な視野である。つまり、インターネットは、学校美術教育に新たな道具や教材をもたらすことで、新たな学習の可能性を開拓し、学校という閉ざされた世界に、社会を介入させる。

このようにして、学校美術教育は、現代の社会における様々な美術を子どもたちに根付かせるために、彼らに多様な美術のための情報と相互のかかわりを提供して視野を拡大させ、子どもたちの生活する社会に適した美術教育へ、これまでの美術教育から変わっていかなくてはならない。インターネットを利用することによって学校にいる子どもたちと教師によって進められてきた美術教育は、世界中の学校にいる子どもたちと教師たち、研究者、学芸員、作家といった様々な人々がネットワークによってつながることによって、共同体となる。そこで、人々は、インターネットを活用して、広域な視野をもって時代に適した学校美術教育の学習を選択し、相互的な学習を促進していくようになる。インターネットは学校美術教育を変革する有効な手段であり、インターネットを利用して美術教育の共同体が子どもたちに社会における美術を学ばせるように機能することで、相互性や社会性における教育的な効果が見込まれるようになる。このような考えに基づいて、本研究は、先きに述べた効果に基づいて美術教育の社会化を図るために、国内でははじめての学校美術教育におけるインターネットの活用を考察する博士論文として、学校美術教育におけるインターネットの有効性を確証する。

第2節 研究の目的

1. 本研究の背景

コンピュータや情報機器の社会的普及に伴って、現在ではインターネットは家庭から職場まで日常的に利用されるようになった。学校教育の情報化政策として、文部省、通産省、自治省、郵政省によるミレニアムプロジェクトが進められている。来年度の2001年にはすべての学校にインターネットの導入が完了され、2005年にはすべての教室、教科、教員のコンピュータから利用可能となる。そして、これまでに接続設備を整えた諸学校は、通産省、企業や法人の主導によるプロジェクトに参加し、成果を公表してきた。様々に学校教育でインターネットを活用しようとする活動の経緯を経て、国内の学校はそれぞれのホームページをネットワーク上に設立するようになり、現在の美術教育者たちも教科の特色を生かしたインターネット利用の学習を模索するようになった。

しかしながら、こうした日本の教育政策は学校教育全体においては大規模な設備投資や教員研修における基礎的技術指導に主な焦点があてられている。そのため、インターネットを活用した教育研究は教科教育学において十分な研究がされていないまま、学校教育現場で試行されている。美術教育学においてもインターネット活用の研究が十分に行われていないことによって、その目的・方法・方向性など教育が確定になっていない。教師は、学校教育現場において方向性も分からぬまま一から題材を開発する負担を負わなければならず、実際にはインターネットが導入されても利用しないという状況を生みつつある。そして、美術や図工といった美術教育でインターネットが教師によって利用されないことは、子どもたちに影響を及ぼす。美術教育の授業でインターネットを活用する指導を受けない子どもたちは、その利用を知らない。その結果、教師と子どもたちという利用者の不

在によって、美術教育でインターネットにかかわった新しい学習は展開しない。

インターネット先進国である米国では、「ゴール2000法令」等にみられる国や州政府、私設財団や研究者、学校教師による各専門家集団の一体となった働きによって、わずか4年程でこの分野において確実に研究に蓄積がされてきている。現在の日本においては、技術の習得に留まらず、美術教育学として学問に適合する専門的な研究と、これにそつた教員の研修プログラムが、研究者を中心として組織的に開発されるべき時であるといえる。

2. 本研究の目的

インターネットの世界では、文字に限らず画像等の視覚情報が頻繁に扱われている。こうした視覚情報を造形原理や構成要素に基づいて学習対象にできるのは、図工・美術教科である。美術教育は、視覚情報の制作を行うと同時に、視覚情報に基づいて社会や文化の理解を総合的に扱う学問領域であり、個人の視点と社会の視点の調和を実現することが根幹にある学問である。これから的情報化社会に埋もれない個人、社会集団の形成のためにには、情報の制作、発信、受容、選択、利用において、専門的で総合的な視覚情報における知識が生涯にわたって重要となる。

しかしながら、現在、図工・美術教科の情報ではインターネット上にある各学校のホームページの中で実践の記録や作品を紹介するようになってきたが、他の教科と比べて未だ割合は少ない。さらに、インターネット上においても出版物においても、インターネットを活用した実践の紹介はわずかにしかみられない。このような状況から、インターネットを利用した教育において美術教育の特色が、十分に生かされているとはいはず、現時点では、情報化時代に生きている子どもたちにとってインターネットと美術教育は関連性のないものとして映っている。教科教育学としての美術教育に学校教育現場で求められているのは、これにかかわる将来の指針となるべき教育理論であり、同時に、具体的な指導事例である。

そこで、本論文は、学校美術教育におけるインターネット利用の指針となる教育学の理

論や、具体的な題材、現職教育のプログラムを将来的に開発していくため、これらの基礎となる研究を行うことを目的としている。本論文は、美術教育におけるインターネットの活用に適応する教育理論の提案、米国の先行事例、国内の現状分析を行う。研究は、日本においてインターネット利用の美術教育についての可能性を探ることを目的としている。このため、1から5章までのいずれについても国内の現状を考え、問題点の指摘、これを補う事例を挙げることで、近い将来における学習の展開に役立つことを前提としている。

美術教育学は教科教育学のひとつである。そのため、本論文では近年の教育学に根本を置き、学習の過程を重視している。時代やその社会背景によって教育は影響され、学習の成果は左右されることがある。また、本研究のように歴史的背景の浅い研究においては、断定的な学習の成果を示すことは不可能である。こうした理由から、子どもたちの学習においても、美術教師の現職教育においても、本論文では、現段階におけるその活動や可能性を尊重することで、インターネットを美術教育で活用する際の基礎や方向性を提示することを目的としている。そして、このことは、必ずしもかなり先進的で応用的な活用を提案しているというのではない。応用的な研究を行うまでには必ずしもその基礎が考察されることが必要である。本研究で美術教育におけるインターネットの活用について基礎的な可能性を多様に提示することは、社会におけるインターネットの利用と、学校教育現場におけるインターネットの利用の格差をわずかでも確実に縮めることに役立つと思われる。

3. 本研究の対象

日本とアメリカの学校教育を主な対象として、美術教育におけるインターネットの活用を考察する。ただし、学校教育における美術教育は、学校組織の中で単独に成立している訳ではない。学校教育は社会の中に位置しているし、美術教育も同様である。そこで、学校教育に直接関連して影響する、国家政策、大学、民間財団といった組織や、研究者、教師を含む美術教育者と芸術家といった人々についても、本研究の範囲となる。具体的には、第1章では日米の教育政策、第2章では社会や教育、第3章では図工・美術における領域、

第4章では学習のための教材・教具、第5章では現職教育を扱っている。

したがって、美術教育の研究としては、対象を学校教育に限定したとしても、必ずしもその範囲は学校教育現場に限られない。また、学校教育を対象としていても、美術教育は子どもたちだけを対象者とはしていない。美術教育の研究における対象者は、学校教育においては子どもたちが中心でありながら、教育内容を実現する美術教育者もその対象者である。本研究では学校教育を対象としているため、対象者は子どもと美術教育者に限られる。つまり、学校教育を対象とし、これに関わる社会を範囲として、子どもたちと美術教育者のために研究を行う。子どもたちのための美術教育は、美術教育者によってつくられるからである。

教育学においては、近年、学校という枠組みに限定されない学習システムを唱えたことで注目されている、イヴァン・イリッチの研究、ポストモダニズムにおける教育の多元化を取り上げる。前者におけるイリッチの著書の内、教育学では脚光を浴びていない、『コンヴィヴィアリティーのための道具』は、学習ネットワークの構築を提案している。経済システムによって権力が集中されることを嫌い、草の根の力を理想として彼がウェブと記したネットワークの理念は、現在のインターネットの開発者たちの基礎となっているからである。また、後者の教育の多元化については、学校教育の現状において、「生きる力」の育成や、「地域理解」、「国際理解」が促されて実践されている。これによって学校教育でも緩やかな「社会教育」、「生涯教育」の考えが取り入れられてきた。このような現代における草の根の力や多元化の教育学を美術教育において理解する際に、人、社会、文化の断片としての情報が必要な教材資料となる。これらを支える道具として活用されるのがインターネットである。そこで、本研究は学校美術教育におけるインターネットの活用について、学校教育を対象とし、子どもたちと美術教育者を対象者としている。

ただし、取り上げる先行事例や研究は、1995年から2000年にかけての過去5年間におけるものであり、インターネットの社会普及と同様、すべては未だ発展の過程にある。したがって、これらを基礎資料とした本論文も、現段階における基礎的な意味での研究の成果として著す。

第3節 研究の方法と内容

1. 本研究の方法

研究方法としては、目的、組織運営、実践方法などを、文献資料、インターネット上の資料に基づいて研究する。また、実践の提案においては筆者自ら行った授業を考察している。資料としては博士論文、学会発表ビデオ、ホームページ、定期刊行物、リーフレット、アンケート結果等を揃えた。

第1章では、急速な展開を遂げてインターネットが学校へ導入されるまでの、日米の教育政策を調べるために最も新しい資料が不可欠であった。そこで、未だ印刷物として出版されていない省庁の掲げるネットワーク上の資料を利用し、同時に論文や書籍からも情報の位置を確認することにする。こうした資料から、近年の情報教育や技術教育における推進をたどる。そして、日本の美術教育における現状を分析する。

第2章では、インターネット利用及び技術利用の教育にかかわる論文や、書籍を中心に教育論をまとめ、実際的な個々の教育目標や授業方法の提示については、各学会の学術雑誌から取り上げる。学校教育を対象とした国内の教科教育学において、インターネットの活用を研究した博士論文をみつけることができなかった。そのため、ここでは教育学との領域としての美術教育について、インターネットを学校教育で活用する意味を考察する。

第3章では筆者自らインターネット利用の教育を中学生に指導した経験から、作家による芸術活動や書籍資料に基づいて実践的研究方法を探り、より実際的な授業の提案を心掛けた。それというのも、美術教育における学会や研究会、教科書等において、インターネット利用の授業実践の例は、本文で引用した奥村氏と筆者によるものを除くと、ほとんどみられない状況であったためである。そこで、ここではあえて具体的な実践を提案している。

第4章では、学校において利用できるメディアや関連機器を考慮し、主な調査対象として、新たな教材・教具としてのインターネットを調べる。第3章では、美術教育における学習領域にインターネットの利用を当てはめたが、この章では、美術教育の学習全体を通して活用できる、学習の道具としてのインターネットの利用を考える。学習題材が異なる様々な場合においても、授業時間以外においても、インターネットは広く美術教育にかかわって利用される。そのため、利用者は、子どもと美術教育者を共に想定している。

第5章では、学術論文や博士論文などの文献資料と、インターネット上に公開された作品や活動の記録などを照らし合わせて、米国における事例の要点や概要、意味を探る。美術教育におけるインターネット利用の研究事例は、国内においては、未だ十分な発展や展開がみられない。インターネットを利用して美術教育のコミュニティーを提案する米国における学校美術教育の事例は、日本国内では行われておらず、国内における現職教育の可能性を示唆しているため、研究対象とする。

2. 本研究の内容構成

本研究は、各章ごとに研究形式が異なっている。本論文においては、事例研究、理論研究、実践研究を総合的に扱うことを考えたためである。本研究は、学校美術教育においてインターネットを用いることを提案している。将来、この研究領域においては、従来の学習を生かしながら、新たな題材、新たな学習方法や内容が築かれて導かれるであろう。しかし、初期である現在においては、その前に、それらの基礎を提案する研究が必要である。この領域において美術教育が実際に効果的に進められるためには、実践を重ねることだけや、意義をみつけることだけに偏らず、状況の分析、目標、先行事例等を含む、体系的な研究が基礎として理想であった。そこで、本研究は、学校教育における教育目標から題材化までを視野に入れて現段階における基礎を提案している。

第1章では、日米の学校教育においてインターネットが導入されるようになった経緯を追い、インターネット利用の学習の意味を社会的に考察することを目的とする。また、国

内の学校美術教育のホームページを調査し、その活用方法を分類し考察することで、現状に合わせた活用の可能性を理解する。

第2章では、学校教育においてインターネット設備の導入が拡充している中で、これを活用する教育学理論の研究が追い付いていないという現時点における状況がある。このことから、その理論的基盤を構築するために、インターネットを学校教育で利用することが教育学に、美術教育にどのように適応されて位置付けられるかを調べる。

第3章では、実践的研究として、図工・美術授業において利用した自らの指導事例や指導方法等を提案する。美術教育においてのみ学習できる情報化社会に対応した創造的、批判的姿勢を子どもたちに育むため、実践は、視覚的情報を制作し、デザインし、他者に向けて発信すると同時に、自ら受容するという、一連の学習過程を現行の学習領域に当てはめたインターネット利用の実践が不可欠となるためである。

第4章では、学校美術教育においてホームページが掲げられるようになってきた現状における問題と、インターネットを活用しない美術教育の授業における課題を提示し、これを解決策を探る。そのため、インターネットを学校美術教育において広範に利用できる学習のためのメディアとして取り上げる。

第5章では、インターネット利用の美術教育の利点を生かして、現職教育の場としてネットワークを利用した学習コミュニティーの形成を実践している、アメリカにおける事例を調査し、分析する。現職教育プログラムは、国内では、美術教育学において、未だアメリカほど注目されてはいない。このため、こうした先行事例の研究は、よりよい美術教育を求めるながら、日常では学ぶ場所を得られない教員が、自らの専門性を向上する機会を得られる。

各章の内容は、学校教育におけるインターネットの活用について、基礎を提案している。そして、ここで取り上げた基礎は、現状の美術教育やそのインターネットの活用状況において、筆者自らが問題意識をもっている事柄に対する、問題提起であり、筆者なりの回答であり、改善策を含んでいる。現実問題に即して研究を進めることによって、美術教育における具体的な可能性が提示でき、場合によっては実際に役立つと考えるからである。

3. 本研究の限定

本研究は、1995年より開始され、1997年より2000年までに学会誌や機関誌で取り上げられた学術論文が、全体の約半数を占め、1997年より2000年の日本の調査現状と、1995年から2000年までの事例に限定されている。このうちの各年度によってインターネットの社会的な普及率は、異なって発展しつつある。同様に、学校教育現場におけるインターネットの普及率も年度ごとに違いがある。そこで、厳密にいえば、本研究における対象や範囲、研究成果は同時期に出されたものではなく、過去5年から3年間におけるずれが生じている。しかしながら、本研究は科学的な意味よりも教育的な理由で進められたこと、インターネットを美術教育において活用する研究が始まったばかりであることから、微妙な研究期間のズレは、教育にインターネットを利用する基礎的研究として重要な問題にならないと思われた。

実際の学校への普及率は、小学校、中学校、高等学校、特種教育学校の約4万校の内で2000年度以前にインターネット導入が行われたのは3分の1程である。教科間で利用率の低い美術教育において、インターネットをすべての子どもたちが利用できるようになる環境が整うまでには、よりいっそうの研究がなされる必要があろう。ただし、それまでには、初期的な研究が必要であり、それが基になって次の研究や実践が展開される。この論文は美術教育に限定して、基礎的な研究を示すためにつくられた。したがって、美術教育以外の教科教育におけるインターネットの活用や総合教育におけるインターネットの活用、芸術におけるインターネットの活用、インターネットのインフラストラクチャーなどについては、この論文の中では具体的には触れていない。各学問領域においてはインターネットを活用する意味も、方法も異なる。2000年段階における初期的な研究としては筆者の専門分野である美術教育にあえて焦点を定めることによって、可能性の拡散ではなく、美術教育においてインターネットを活用することで、現職教育を促進する、美術教育の授業において資料の選択幅や視野を広げられるといった方向性を示すことができると考えた。そして、同様に、目的を美術教育に限定していることから、インターネットの基本的な技

術用語の説明や解説を省き、最小限のインターネット関連用語で記述している。このため、インターネットを詳しく知る人にとっては遠回しな表現であったり、基礎的な内容になつている。現状のまま学校美術教育でインターネットの利用やコンピュータの利用が行われないなら、ほとんどの子ども達の将来からこれらを用いた美術活動が欠落しかねない。この論文ではすべての美術教育にかかわる人々によって、従来の学習内容と同じように美術教育のメディア化、情報化が考慮されて、少しでも理解されたいと考えている。そこで、この論文では、学校美術教育におけるインターネット活用の基礎に研究を限定している。

序章のまとめ

政府によって全国の学校教育現場へインターネットの導入が2001年をめどに進められ、2005年にはすべての教科・教室で活用されるようになる。そして、美術教科や美術教室からもインターネットが活用されるようになることが既に決定されているにもかかわらず、現在における美術授業ではインターネットが活用されていないため、美術教育におけるインターネット活用は未開拓の研究領域であるといえる。そこで、本論文では、学校へのインターネット導入の背景と美術教育におけるインターネットの活用状況について分析を行い、これに基づいて美術教育におけるインターネットの活用方法や意義を提案することで、これからの中等教育におけるインターネットの教育的意味を探求しその効果を確証することを研究の目的としている。このような研究の目的を達成するために、本論文では5つの研究課題を設定した。

- ①本研究において日米の学校教育現場にインターネットが導入されたことになったその経緯を考察することで、インターネットを活用する教育が推進されるに至った背景を明確化し、そして、その背景の下、日本の学校美術教育における活用状況の分析から現状を理解すること。
- ②他の教科と比べてインターネットが学校の美術教育では活用されていないという状況において、あえてインターネットを学校美術教育で活用するためには必要となる特有な学習の意味を確証すること。
- ③インターネットを学校美術教育で活用する実践がほとんど行われていなかった1996年の国内状況から絵画領域におけるインターネットを学校美術教育で活用する実践を行い、1998年にはデザイン領域で、1999年には鑑賞領域でもインターネットを活用して先導的価値をもつ美術教

育の題材を開発し、その学習の方法を提案することによって、美術授業において子どもたちが実際に行えるインターネットの活用を明確化すること。

④美術教育におけるインターネットには、ネットワークを通じて教師や子どもたちが成果を共有しあえる学習メディアという、従来の美術教育における材料や用具とは異なる特性が存在することを論証すること。

⑤インターネットを活用したオンライン美術教育コミュニティーが形成されることによって、これまでの日本の美術教育においては欠落してきた現職教育や社会との連係による学習機会を増大させられることを事例に基づいて立証すること。

これらの考察を通して、美術教育におけるインターネットの活用について、現状理解、意味の確証、活用方法の明確化、学習メディアという特性の論証、学習機会の増大を立証することによって、現状の課題を解決する新たな学習の意味、学習の方法、学習メディア、学習の機会を拡大させる美術教育におけるインターネットの活用が学校美術教育に変革をもたらすことを証明する。そして、このことによって、現状の美術教育における課題として挙げられる「現代社会からの美術教育の隔離」を改善し、今後の来るべき情報化社会に適応させ、美術教育におけるインターネットの活用が情報化時代の子どもたちに不可欠となる相互性に基づく教育的効果があることを明確にする。